

## 故館 稔所長を悼む

館 稔経済学博士の急逝は、ひとりわが国人口学界の損失のみならず、世界の人口学界にとってもきわめて大きな損失であった。とくに、世界の人口問題のうち、最も重大なアジアの人口問題の解決のために1970年代の行動計画を議すべき第2回アジア人口会議の開催を半年後にひかえて他界されたことは、故博士の最も心残りであったことと推察され、エカフェ当局をはじめ、厚生省、人口問題研究所など、関係者一同にとっても、痛恨おく能わざるものがある。

顧りみれば、故博士の人口研究は、財団法人人口問題研究会の1933年創設とともに研究員として諸事業の推進に尽力されたのに始まる。この研究会の全国協議会の建議の世論を背景として、厚生省に人口問題研究所が1939年創設されるや、研究官として博士の人口研究はいよいよ深さを増すとともに、multi-disciplinaryな人口学の研究にふさわしい多方面の知識を吸収された。

かくて、長年にわたる人口学研究の集大成として、1960年“形式人口学”がまとめられ、経済学博士の学位を得られた。この論著において、博士は人口の本質を社会的有機的自己再生産運動とし、これを主軸として人口分析方法に独自の体系を樹立された。

戦前から戦後にかけて、人口統計に関する著書はすべて人口静態統計論、人口動態統計論とからなる人口統計生産論の立場に立つものであった。この中において、森田優三博士の1944年の“人口増加の分析”は、人口増加を人口統計学のための体系原理とされた画期的な名著であった。これに対し、館博士は人口現象の最も包括的な局面である人口増加のさらに内面にある、人口の自己再生産の自動運動にその体系原理を求められたものとして、この論著は独特の名著たるに値した。

戦前の数少ない、しかも生産論的な人口統計研究に比べて、戦後における急激な人口転換と、人口問題の中心課題の変動とともに、人口分析ならびに人口問題の研究の重要性はいっそう増大し、各専門科学の立場からの人口研究の学徒は戦前とは比較にならないほど増加し、日本人口学会も1949年に発足した。かかる、人口研究の分野において、故館博士の研究は常に独創的な、先駆者的な研究として価値高く評価されていった。

なお、大学や研修所などにおいて、統計学、経済学、社会学、地理学の学徒に人口学に関する多大な関心をもたせる名講義をされ、人口問題審議会はもとより、数多くの各種の審議会、委員会においては、豊富な知識によってそれぞれ有益な意見を開陳され、各方面に人口問題の重要性を認識させていかれた。

一方、第2次大戦後における世界の人口問題も、とくにアジアにおける開発途上国の人口爆発と経済開発との関連を中心としてきわめて重大化し、国連やエカフェは人口対策の活動に対する努力が重大化してきた。国連・経済社会理事会は人口委員会を設けて、そうした問題とその対策を審議してきたが、各国の人口学者から囑望されて館博士は日本代表として委員に選任され、国際場裡での活躍は増大し、博士の地位はしだいに重きをなしてきた。

故館博士の国際的な活動は、それより前1954年の第1回ローマでの、1965年ベオグラードでの第2回世界人口会議での有力な発言のほか、1957年6月発足したボソベイの人口調査訓練センターの諮問委員に任ぜられるなど、国際的な分野における人口研究、人口問題対策の促進に多大の貢献をされた。

また、1966年に東京で開催された第11回太平洋学術会議においては、人口学のシンポジウムの開催にはまさに身を挺して人口問題研究所のスタッフを動員して尽力されたこともわれわれの記憶に新たなところである。

なお、それより前1963年、第1回アジア人口会議がニューデリーにおいて開かれ、博士も国連専門家として出席され、その後のエカフェ総会において10年毎に開催されることが決議され、第2回が1972年11月に東京において開催されることとなったのである。今回の会議は第1回とはやや異なり、政府間会議であるが、外務省、厚生省大臣官房企画室と協力して、人口問題研究所が実質的に努力すべき責任はきわめて大きい。この会議の推進の準備段階において、館博士はエカフェ当局とくに人口部と密接な関係を保ちつつ尽力されてきたのに、あと半歳という準備の最終段階において、会議の成果をみることなく急逝されたことは痛恨のきわみであり、残された所員一同が会議の成功のために努力すべき責任はよりいっそう重大となった。

ひるがえって、人口問題研究所としても、各部科(課)の調査研究の業務の指導に、その博学多才をもってすぐれた手腕を発揮されていた館博士のあまりにも突然の逝去は、尽大な損失である。それだけに、残された所員一同の今後の責任はきわめて重く、かつ大きいことを痛感せざるを得ない。

われわれ人口問題研究所は、所葬をもって故館博士の冥福を、多数の参列者とともに祈りした。しかし、さらに故博士の業績を偲ぶために、この機関誌を追悼号とし、故博士の遺稿とみなされる論文を掲げることとした。

本論文は、近代的人口問題の歴史的変遷を欧米における人口革命以前と、それ以後とに分けて回顧し、時代的な人口問題の中心課題に対応した人口理論の歴史的発展をまとめられたものである。これらの概略は、すでに“形式人口学”に記されている部分もあるが、最近までの内外の研究をもとりいれて博士なりに人口理論序説としての独自の体系を整えられつつあったものと考えられる。

故博士自身としてはなお加筆され、より完全な人口理論を構成されたかっとも推測されるが、本論文はこれ自体、われわれ人口研究者にとっては裨益するところがきわめて大きいと考え、ここに掲げることとした。博士の考えられる“人口学”の大きな構想が人口研究者に与えられないままに急逝されたことも人口学界にとって誠に惜しむべきことであった。この意味において、この遺稿は、せめてそうした構想の一端を推測するよすがとしたいと考えて、あえて掲げることとしたものである。

本誌にあわせ掲げた中野英子技官との共同論文も、中野技官が故博士の指導によって研究を進められたもので、生前博士自身の書かれた遺稿部分に中野技官自身の分析結果をも加え、最終的に中野技官がまとめられたものである。

故博士が、その博学をもって各方面の学会誌その他に掲げられた論文は、本誌にその主要なものを掲げたものをみても明らかなように、多方面にわたり、その数は算えるにいとまがないほどである。しかし、本誌に掲げた論文をもって、一応、最後の、そして最終的なものとして認め、故博士の業績を偲び、かつそれをたたえ、その遺志をついで人口学研究の徒が人口学建設のために努力すべきことを誓い、謹んで故博士に対する追悼の辞としたい。

1972年6月15日

上 田 正 夫